

「**幸せの天才**」 ルカ 5：1～11

I 導入部

おはようございます。9月の第四日曜日を迎えました。今日も愛する皆さんと共に私たちの救い主であるイエス・キリスト様を賛美、礼拝できますことを感謝致します。

私たちは、毎週会堂に集まります。何のために集まるのかと言うと、神様を礼拝するためですが、神様の言葉を聞くために集まっていると言えるでしょう。この世の中には、新聞や本には面白い話やためになる話が多くあります。それらを聞くためには、テレビやインターネットで聞くことができます。神様の言葉、聖書の説教でも、インターネットで他の教会の礼拝のメッセージを聞くことができます。しかし、私たちは、青葉台教会の礼拝として、塚本先生や私のメッセージ、神様の言葉を聞くために集まっています。

先週も3連休、今週も3連休、1週間開けてさらに3連休というカレンダーで、礼拝に行くことへの闘いがあるようにも思えます。しかし、こうして、多くの方々が礼拝を守るため、神様の言葉をきくために集まっていることはすごい事だと思います。

今日も、開かれた聖書の箇所から聖霊が一人ひとりの必要をご存知であり、必要なふさわしい事を語って下さることを期待します。今日は、ルカによる福音書5章1節から11節を通して、「**幸せの天才**」という題でお話し致します。

II 本論部

一、思い通りにならない時こそ

人生には、自分の思い通りに行かない時というものが必ずあります。どんなに頑張っても、努力しても、結果が出ない、思い通りには行かない時というものがああります。そのような時に、気持ちを切り替えて、物事に取り組んでいけたらいいのですが、なかなか落ち込んでしまい、尾を引いて切り替えて前に進むことができないことがあります。

今日、登場するシモン・ペトロも思い通りに行かないで疲れ果てていたのでした。一晩中働いたのにもかかわらず、一匹も魚が捕れなかったのです。どんなに努力をし、網を投げ続けても、雑魚一匹も獲れませんでした。失望と疲れのゆえに、今日の生活のための糧がないことのゆえに、がっかりし、絶望し、落ち込んでいたのがこの時のペトロの姿でした。ペトロが一晩中働いても何も獲れなかったということは、店を開いても誰一人も来なかった。営業に出かけ、いくつもの会社で話しをしても商談が一つもまとまらなかった。注文が一つもこなかった。礼拝が始まったのに、だれ一人来なかった、ということです。そこには、疲れや空しさ、切なさ、言いようもない絶望があるのではないのでしょうか。

イエス様は、そのようなペトロの疲れ、空しさ、切なさや痛みをご存知でした。ペトロは汚れた網を洗い、後付けして、一刻も早く家に帰り休みたいと願っていたでしょう。

一方、イエス様は、ゲネサレト湖、別名ガリラヤ湖の湖畔に立っておられました。群衆がイエス様をめがけて集まってきました。イエス様の言葉を聞こうとして集まってきたのです。イエス様は、二そうある舟の内、シモンの舟に乗って、岸から少し漕ぎ出すように頼まれたのでした。

イエス様は、舟に腰を下ろして、群衆にお話しをされました。ペトロは、舟の中で一番イエス様の話が聞ける場所で、イエス様の語るお話を聞いていました。けれども、耳には、言葉は入ってきますが、心には響いてこなかったでしょう。肉体的に疲れていました。さらに、イエス様に頼まれて舟をこぎ出し、聞きたくもない話を聞かせられて、さらに疲れが増していたことでしょう。聞きたくもない話なのに、座席が一番いい席というのは、つらいものです。できたら、一番後ろで、目立たない所で、眠って時間を過ごしたいと願う者です。ペトロは、イエス様のそばで、おそらく、舟を漕いで移動するのではなく、もう一つの舟を漕いでいたのです。(居眠りをしていたでしょう。)

私なら、こんなに疲れているペトロに、舟を漕ぎ出してくれ、とは絶対に頼めません。早く片付けして、家に帰り休んでください、と言います。けれども、イエス様は、ペトロの疲れや早く休みたいという思いを十分知っておられました。十分知っておられたのに、あえて、ペトロの船に乗り込んで、少し漕ぎ出すように頼んだのです。私たちの信仰生活においても、強いられて何かをしなければならぬということがあります。聖書を読む事においても、祈ることにおいても、奉仕においてもあるでしょう。イエス様は、私たちの疲れをご存知です。大変さを知っておられます。それをご存じで、強いてなさることがあるのです。それは、ペトロになされたように、驚くべき神様のみ業を見せるためなのです。

二、どんな時にも語られる神の言葉

長いお話しも終わり、ペトロも眠りから覚めたのでしょう。イエス様は、疲れ切っているペトロに驚きの言葉を語ります。皆さんと共に4節を読みましょう。「話し終わったとき、シモンに、「沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をなさい」と言われた。」新改訳聖書では、「深みに漕ぎ出して」とあります。原文では、「深み」となっています。海の深みとは、怖いイメージがありますが、聖書においては、やはり不吉なイメージがあるようです。または、未知の世界とでも言えるでしょうか。

一晩中働いても何も獲れず、クタクタになり、イエス様のお話しでぐっすり眠ったと言っても、疲れが残っているペトロは、イエス様の言葉に応答します。5節です。「シモンは、「先生、わたしたちは、夜通し苦労しましたが、何もとれませんでした。しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましよう」と答えた。」新改訳聖書では、「でもおことばどおり、網をおろしてみましよう。」となっています。

「わたしたちは、夜通し苦労しましたが、何もとれませんでした。」これが現実です。何も獲れないということが、ペトロの疲れの源です。努力した甲斐がない。あの苦労は、あの努力は、なんだったのか、ということです。そして、明日の仕事のためには、使用した網をきれいにしなければならなかったのです。魚が捕れていれば、網を洗うことにも前向きになれます。しかし、何も獲れなかった。一匹の獲物もなかった。その上に、網を洗う

余力はなかったのですが、何とか仕方なしに、力も出ない状態で網を洗っている所に、イエスが自分の舟に乗り、岸から少し漕ぎ出すようにと言われて、ペトロは、ルカによる福音書4章では姑の熱をイエスが癒して下さったこともあり、恩があったので、それにはお答えした。けれども、次は、「**沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をなささい**」と言われる。偉い先生の言われることに今までは従ってきた。けれども、漁に関しては、先生は素人。プロの私が一番獲れる時間帯に、一生懸命に努力して何も獲物が獲れなかった。しかも、今は日が昇り、魚なんかいない時間帯で、最悪の条件。そんなところで、網を投げても無駄、無理、あり得ない。しかも、網を洗ったばかりで、網を投げるということは、また、汚れて洗わなければならない。また、仕事が増える。やめて下さい、と言いたい気持ちで一杯のペトロでした。でもイエスは、全ての事を理解し、ご存知の上で、ペトロに「**沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をなささい**」とあえてご命令になったのです。

神の言葉が神の言葉として語られ、神の言葉が神の言葉として聞かれ従う時、驚くべき神の大なるみ業が起こるのです。私たちは、神の言葉を神の言葉として聞いて、従って行動したいと思うのです。

三、神の言葉を神の言葉として聞く

ペトロは、疲れ切っていて、漁のプロとしても最悪の条件であることを知りながらも、「**しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましよう**」と、網を降ろしたのです。イエスの言われた言葉の通りに実行したのです。すると、「**おびただしい魚がかかり、網が破れそうになった。**」のです。

網と言うのは、ペトロにとっては、普段から使い慣れた商売道具でした。自分の漁のプロとしての長い間の経験や勘をたよりに、この網を投げて魚を獲り、生活をしてきたわけです。ですから、この網は生活のよりどころの象徴でした。しかし、何も獲れないというむなしい結果に、この網を洗うことにも辛く、何も獲れない網を洗うことは本当に辛い事でした。しかし、常識や経験、プロの勘を超えて、ただ、イエス様のお言葉に従って行動するという行為を通して、何も獲れない網の中に驚くべき多くの魚が獲れたのです。一その船だけでは、どうにもならないので、もう一そうの船に援助してもらわなければならないほどの大漁でした。ペトロの何十年と言う漁師としての生活の中で、こんなに一度に魚が獲れたことは今までに一度もなかったのです。しかも、条件も悪い、非常識な状況での漁に、あり得ない結果、奇跡ともいべき結果だったのです。

ですから、ペトロは獲れた魚の多さに恐れをなして、イエス様の足元にひれ伏して、「**主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者なのです**」と叫んだのでした。イエス様は、ペトロの仕事上の経験、大漁と言う経験を通して、恐れを与えられたのです。

5節では、イエス様のことを「**先生**」と呼んでいました。しかし、ここでは、「**主よ**」と変わっています。ペトロにとっては、群衆がイエス様のお話を聞きに来るほどに、偉い先生、立派なお方ということだったのでしょう。しかし、自分の経験や常識をはるかに超えた状況に恐れをなし、このような事をなされるお方は、主、神様だと確信したのです。

神の言葉が神の言葉として語られ、神の言葉が神の言葉として聞かれる時、罪の悔い改

めが起こされるのです。ペトロが経験した奇跡の業は、ペトロ自身が疲れと挫折の中のことです。イエス様を神様として期待し、信頼して、前向きにと言う時ではなく、心折れそうになり、失意のどん底にある時に起こったみ業でした。

私たちは、信仰的に落ち込んでしまうことがあります。祈っても答えられない。自分の状況が一向に良くならない。希望がどこにも見えない挫折と失意の中にある時、私たちは、神様の声が、神様の言葉として聞こえない時、聞かない時があります。しかし、神の言葉は、信仰的に調子が良い時も、悪い時も語られるのです。語り続けられているのです。私たちが、どのようなどん底を経験しようとも、神の言葉は神の言葉として語られているのです。私たちが、偉い先生の言葉、ためになる言葉として聞くのではなく、希望がどこにも見えない状況で、神の言葉、「**沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をしなさい**」と神の言葉として聞いて、深みにと漕ぎ出す時、神様の驚くべきみ業が目の前で起こるのです。

自分の罪深さに恐れ、おののいているペトロにイエス様は語られました。「**恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる。**」 ペトロは、神の言葉を語られるイエス様の言葉を神の言葉として聞いて、全てを捨ててイエス様に従ったのです。私たちも、神の言葉として語られる言葉を神の言葉として聞いてイエス様に従いたいと思うのです。

Ⅲ 結論部

「**幸せの天才**」とは、朝の連続小説テレビ「半分、青い」の中で語られた言葉です。主人公と同じ日に生まれた、幼馴染の律のお母さん、和子さんのことを主人公の鈴愛（すずめ）が、「**幸せの天才**」と呼ぶのです。和子さんは、病気で自分の思うようには生きて行けず死んでいきました。けれど、和子さんは、まず、自分の人生をしっかりと見つめ、追いつけるからこそ、周囲の人を明るくすることができました。「**幸せの天才**」とは、周りにいる人々を明るく、幸せにする人なのでしょう。

イエス・キリストというお方は、まさに「**幸せの天才**」でした。悲しんでいる者を慰め、落ち込んでいる人を励まし、病んでる者を癒し、罪ある者に罪の赦しを与えられたのです。イエス様ご自身が、私たちを罪から救うために、罪のないお方、神であるにもかかわらず、私たちを愛するがゆえに、私たちの罪の身代わりに十字架にかかって、尊い血を流し、命をささげ、死んで下さったのです。死んで墓に葬られましたが、三日目によみがえり神の力、復活の力を示され、イエス様の十字架と復活を通して、私たちの罪が赦され、魂が救われ、死んでも生きる、永遠の命が与えられたのです。イエス様こそ、「**幸せの天才**」私たちが愛してやまないお方なのです。私たちが憐れみ、恵みを与えて下さるお方なのです。

私たちには、それぞれに厳しい現実があるでしょう。誰にもわからない苦しみや悲しみがあります。その現実には押しつぶされそうになる時があります。「**わたしたちは、夜通し苦勞しましたが、何もとれませんでした。**」という現実があるのです。イエス様は私たちの現実、痛みをご存知です。だからこそ、「**しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましよう**」と聖書の言葉を、イエス様の言葉を神の言葉として聞いて、神の言葉として受け取り、沖へ、深みに漕ぎ出して行きましよう。そこに、今までに経験したことのない神のみ業が起こるのです。この週もイエス様に期待して、イエス様に従って歩みましよう。